

東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット

Health Policy Unit (HPU)

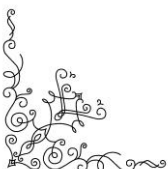
医療政策実践コミュニティー

Health Policy Action Community (H-PAC)

第 5 期 (2015 年度) 活動報告

2016 年 3 月

H-PAC 運営事務局



■東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・研究ユニット(Health Policy Unit=HPU)の活動内容

教育活動: 東京大学公共政策大学院において「医療政策」「事例研究」の講義を行います。

研究活動: 医療政策における喫緊の課題に関する研究を行います。

社会活動: 医療政策実践コミュニティ(H-PAC)の主宰と公開シンポジウムを開催します。

■HPU 運営体制

東京大学公共政策大学院と大学院経済学研究科の教員・研究員により運営されております。

〔スタッフ〕埴岡 健一 特任教授／井伊 雅子 特任教授／辻 哲夫 特任教授／

関本 美穂 非常勤研究員／吉田 真季 特任研究員／岩井 万喜 学術支援専門員

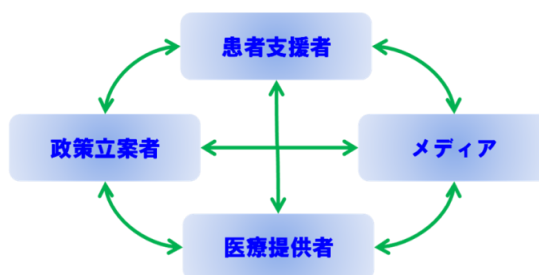
〔運営委員〕岩本 康志 教授／飯塚 敏晃 教授

■寄付企業・団体

旭化成ファーマ株式会社、旭化成メディカル株式会社、オリンパスメディカルシステムズ株式会社、グラクソ・スミスクライン株式会社、サノフィ株式会社、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社、テルモ株式会社、東レ株式会社、公益社団法人日本医師会、一般社団法人日本病院会、フクダ電子株式会社、バイエル薬品株式会社

■医療政策実践コミュニティ(Health Policy Action Community=H-PAC)の活動内容

「医療を動かす」をミッションに掲げ、患者・市民、政策立案者、医療提供者、メディアの4つの立場から医療政策分野においてリーダーシップを発揮している社会人(学生含)の参加者を募りました。医療政策の最先端課題を学び、さらに実践的なグループ活動により、政策提言や事業計画作成を行いました。なお、大学の卒業資格や学位、単位などにはなりません。



■H-PAC 運営体制 (2015年度実績)

〔外部アドバイザー〕大熊 由紀子氏(国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野 教授)[メディア]／勝村 久司氏(医療情報の公開・開示を求める市民の会 世話人)[患者支援者]／高本 眞一氏(三井記念病院 院長)[医療提供者]／信友 浩一氏(九州大学 名誉教授)[政策立案者]

〔メンター〕伊藤 雅治氏(元厚生労働省医政局 局長)[政策立案者]／前村 聡氏(日本経済新聞社大阪本社 編集局社会部 記者)[メディア]／坂本憲枝氏(消費生活アドバイザー)[患者支援者]／渡邊 清高氏(帝京大学医学部内科学講座腫瘍内科 准教授)[医療提供者]

〔HPU内部アドバイザー〕井伊 雅子(東京大学公共政策大学院 HPU特任教授)／辻 哲夫(東京大学公共政策大学院 HPU特任教授)

■H-PAC 第5期プログラム概要

プログラムは主に 勉強会・リーダーシップ研修、レクチャー&ディスカッション、グループ研究、という3要素で構成しました。要素間で相乗効果が生まれるようにスケジュールを組み、6月から12月までは3要素が並行し、1月以降はグループ研究に絞るかたちで進めました。定例の開催時間帯は水曜 18時半～21時です。

〈1〉勉強会

○『レクチャー&ディスカッション』は、異なる背景をもつ参加者が、グループ研究に先立ち、医療政策・制度・システム等に関する基礎的知見や手法を共有することを目的に設計されています。

○計12のテーマを設定し、気鋭の講師を招聘して、レクチャーとグループワーク(4つの立場の混在する班にわかれ、講師の提示する課題についてディスカッション)を行いました。

○勉強会後は自主的な懇親会が開かれ、インフォーマルで活発な議論が展開されました。

第5期勉強会のテーマと講師（区分ごと開催順、敬称略、肩書は勉強会実施当時のもの）

区分	テーマ	講師
研修	リーダーシップの旅	野田智義（NPO 法人 ISL 理事長）
	戦略プラン策定演習	埴岡健一（東京大学公共政策大学院 特任教授）
レクチャー&ディスカッション	患者・住民代表の政策決定プロセスへの参画	勝村久司（医療情報の公開・開示を求める市民の会 代表世話人） 本間俊典（経済ジャーナリスト） 山口育子（NPO 法人 ささえあい医療人権センターCOML 理事長）
	医療基本法	石井麦生（患者の権利法をつくる会） 今村定臣（日本医師会 常任理事） 長谷川三枝子（公益社団法人日本リウマチ友の会 会長） 前田哲兵（患者の権利法チーム）
	地域医療	伊藤雅治（全国訪問看護事業協会 会長、元厚生労働省 医政局長）
	地域医療における機能分化と連携	池田美智雄（IMC 株式会社 代表取締役） 石川雅俊（国際医療福祉大学大学院 准教授）
	疾病別の医療計画・対策のPDCA サイクル	井上智貴（在宅総合ケアセンター成城 センター長） 坂口一樹（日本医師会総合政策研究機構 研究員）
	医学研究とイノベーション	中山健夫（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報分野 教授）
	医療情報の収集と活用	埴岡 健一（東京大学公共政策大学院 特任教授）
	患者・住民への情報提供・相談支援	増田昌人（琉球大学医学部附属病院がんセンター センター長） 若尾文彦（国立がん研究センターがん対策情報センター センター長）
	医療提供者の確保と配置（千葉県柏市の事例から）	松本直樹（厚生労働省職業安定局雇用保険課 課長補佐）
	医療の質と安全向上のための課題マッピング	鮎澤純子（九州大学大学院医学研究院医療経営・管理学講座）

〈2〉グループ研究

○『グループ研究』は、H-PAC参加者が自主的にグループを形成し、自分たちで設定するテーマについて、社会への発信・提言を目的とした研究・実践活動を行うものです。各グループにはメンバーとして4つのステークホルダーから各1人以上が参画することを原則条件としました。

○成果物提出期限に向けて、各グループ主体で研究を推進します。事務局では、グループ形成やテーマ設定の助けとなる場づくりを行い、活動期間には、メンター／アドバイザーによるアセスメント(全3回)、中間報告会の場を設けて研究の進捗支援を行いました。

○各グループが自発的に集い、話し合いやフィールドワークを進めました。また、インターネットなどを活用した議論も積極的に行われました。

○成果物の形態は、各研究グループが以下の中から選択し、設定しました：

政策提言書／事業・非営利活動事業計画書／研究報告書

○成果物の審査・評価は、4ステークホルダーで構成される採点委員会により、以下6軸に沿って行いました。

①ステークホルダー協業によるシナジー②テーマの重要性・喫緊性③実践・実現可能性④視点や切り口の新規性・独創性⑤論理性・実証性⑥表現力・訴求力

第5期グループ研究 9つのテーマ

テーマ・タイトル	形態	研究グループ	メンバー内訳
国保被保険者に対する行動変容の促しを、より効果的に おこなうための提言書	政策提言書	患者支援者 2 医療提供者 2	政策立案者 0 メディア 1
医療費増加による日本の財政破綻を防ぐための考案	政策提言書	患者支援者 1 医療提供者 1	政策立案者 0 メディア 0
みんなの保健室-地域の力でつくる-	事業計画書	患者支援者 2 医療提供者 3	政策立案者 1 メディア 1
終末期医療における事前指示と意思決定	事業・非営利活動事 業計画書	患者支援者 2 医療提供者 1	政策立案者 3 メディア 1
医療事故調査制度 見直し提言	政策提言書	患者支援者 3 医療提供者 3	政策立案者 3 メディア 1
様々な医療指標データを統合する試み ～糖尿病をテーマに～	政策提言書	患者支援者 2 医療提供者 2	政策立案者 2 メディア 1
40歳からの人生を変えよう！ ～40歳プロジェクト活動報告～	事業・非営利活動事 業計画書	患者支援者 3 医療提供者 3	政策立案者 3 メディア 1
本人の意思が尊重され、利用者が主体となって選択できる医療・介護サービスのナビゲーションシステムの立案	事業・非営利活動事 業計画書	患者支援者 2 医療提供者 3	政策立案者 4 メディア 1
地域包括ケアシステムにおける有限人的資源を地域特性から考察する	研究報告書	患者支援者 2 医療提供者 0	政策立案者 2 メディア 0

※グループ研究の過程で4ステークホルダーが揃わなくなってしまうグループについては、成果発表会時点でメンバーとして欠けているステークホルダーから意見を受け、それを最終成果物に織り込むことにより対応した。

成果発表会

H-PACのグループ研究活動は、社会の現実的な受け手に提言することを目指して行われます。プログラム終了時に開催する成果発表会は、コミュニティ内での活動と相互フィードバックにより得られた成果を、社会に向けて発信する第一歩の場です。「医療を動かす」プロセスにおいて各ステークホルダーの頂点に立たれ、意思決定を行われている方々に向け、訴求力のあるプレゼンテーションに磨き上げることが求められます。

2016年3月21日に行った第5期成果発表会では、各グループからのプレゼンテーションに対し、2人のゲストコメンテーターから親身なアドバイスや、今後の活動継続・実践につながるコメントを頂戴しました。

第5期成果発表会 ゲストコメンテーター（五十音順、所属・肩書きは開催当時）

◎神田裕二氏	厚生労働省医政局長
◎横倉義武氏	日本医師会 会長（代理 今村聡氏 日本医師会副会長）

〈3〉二次医療圏データベースの構築

病床機能報告制度で開示されたデータなど多岐にわたる情報源のデータを使い易いようにエクセルシートに整理・統合したデータベースを提供しました。形式がまちまちに公表されていた47都道府県344医療圏のデータを一つのエクセルファイル上で閲覧・加工できるようになったことで、地域医療を検討する際の重要な材料となります。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

〈4〉公開シンポジウム（詳細なレポートはウェブサイトに掲載しております）

OHPU/H-PAC第5回公開シンポジウム

「地域の医療計画を、ともに作る」

2015年5月16日(土)・17日(日) 於: 東京大学 武田先端知ビル 武田ホール

日本が2025年から本格到来する超高齢化社会に適応するため、地域医療計画によって地域に適した地域医療提供体制を整備し、PDCA(計画、実施、評価、改善)サイクルを回し、医療・介護の質を均てん化(あまねく質が高い状態となること)することが喫緊の課題となっています。それに向けて2015年度は、各都道府県が、地域医療計画の一部であり、地域の将来的な需給ギャップを解消する青写真となる「地域医療構想」を策定します。また、2017年度には次の地域医療計画を策定することになり、2016年度からその準備を始める必要があります。計画の策定にはその地域の患者・住民を始めとした多様な立場が参加することが求められます。また、現状を踏まえ、あるべき姿を見出し、それをもたらす効果を生む施策を作っていくプロセスが大切です。

こうした重要な転換点を迎えながら、地域医療計画を地域で具体的にどのように作っていけばいいかの認識とノウハウが大いに不足しているのが現状です。そこで、本シンポジウムでは、具体的にはだれがどのようにどのような注意点を踏まえて計画を策定すべきか、このたび作成された実践ガイドラインに沿って知見を共有し、参加者と議論を行いました。

OHPU/H-PAC第6回公開シンポジウム【最終回】

「地域医療構想から次期医療計画へ～需給ギャップを克服し、アウトカムを達成する～」

2016年 3月13日(日) 於: 東京大学 武田先端知ビル 武田ホール

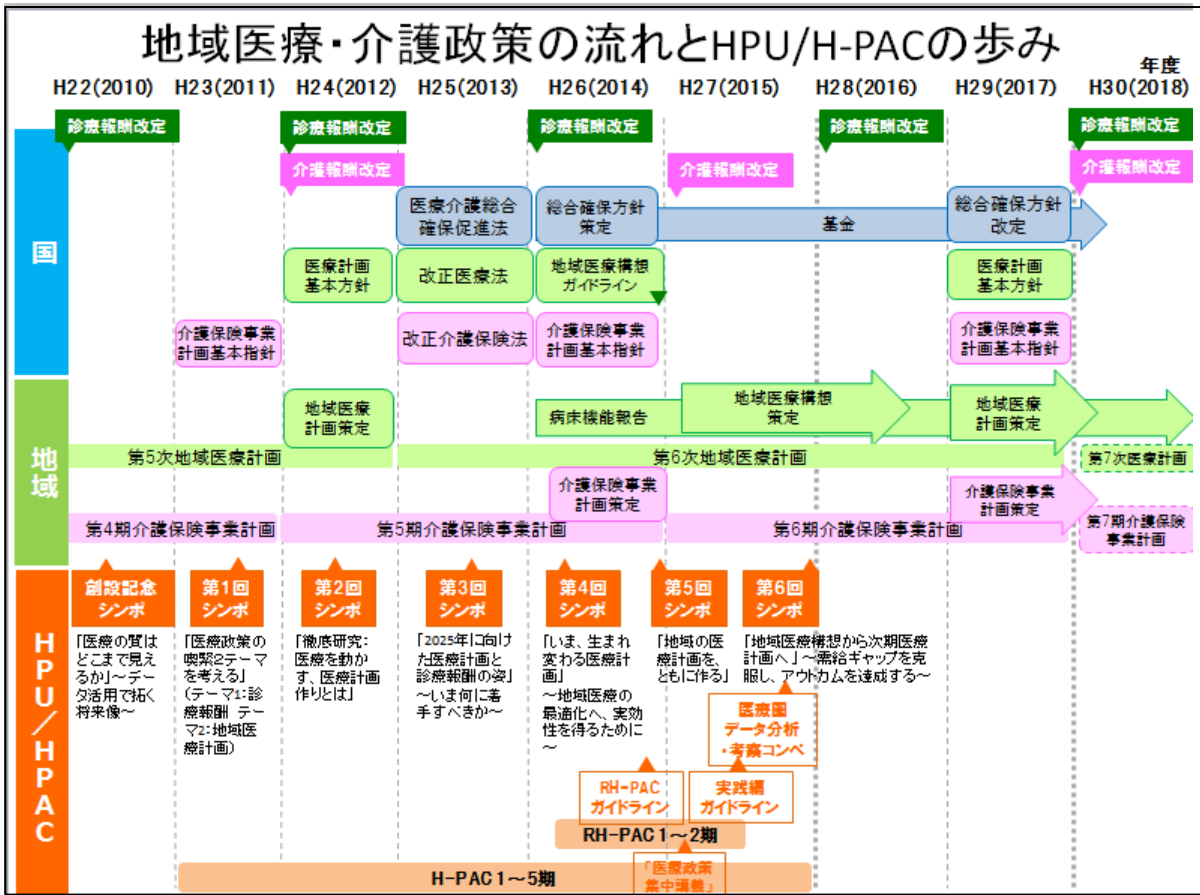
いま、2025年の地域の医療提供体制を描いた「地域医療構想」が各地で作成されています。今後は、そのビジョンの質を高めると共に、そこに描いた体制転換を実際に進めていくことが焦点となります。また、次期医療計画の内容も高める必要があります。そこで、本シンポジウムでは、厚生労働省担当者・有識者による講演、都道府県アンケート結果の発表、パネルディスカッション、ご来場者との意見交換などにより、地域医療構想(計画)を深め、地域の健康アウトカムを高めるための課題と解決策への道筋を議論いたしました。

また、「医療圏データベース分析・解析コンペ」を行い、広く一般からアイデアを募り、市民、学生、医療提供者、研究者などから18点の応募がありました。これらの作品をシンポジウムの場で紹介、表彰いたしました。

○応募作のテーマ (詳細はウェブサイトをご覧ください)(☆☆は最優秀作、☆は優秀作)

1	病床機能報告の公表情報に基づく病院選びの私案
2	2025年に向けて日本型医療の構築におけるデータ分析と地域医療への活用
3	大阪府での2025年NICU需給と周産期(新生児)専門医養成・維持における課題 ☆☆
4	複数の分析ツールを用いたデータ可視化検討
5	北海道の病院をまるっと分かりやすく可視化した「病院検索ツール」の開発
6	XViewシステム(DB分析エンジン)による医療データの利活用について
7	東京都特別区の地域医療充実度調査
8	病床機能報告制度を活用した医療機能の分化への取り組み～H28年度から始まる地域医療構想検討会議に向けて～ ☆
9	健康寿命の規定に関連する要因の分析(健康日本21(第二次)の概念図をもとにして)
10	全国2次医療圏の集約度指数の解析
11	各疾病における標準化死亡比の図示ー地域一丸となって地域医療を進めるための第一歩として
12	二次医療圏ごとの分娩件数に差があるが、その要因は何か?そして予測可能か?
13	日本海側港湾を拠点とする医療ツーリズムの再考を視野に入れた二次医療圏特性に関する考察
14	「出産しやすいまち」とは?ー出生率に影響を与える要因を分析するー
15	病院の機能分化の状況を地域単位で費用化する指標の検討 ☆
16	地域の特性に応じた訪問看護のあり方:在宅看取りの件数と介護のデータから見えてきたこと
17	手術件数からみた医療の実態を可視化する提案ー埼玉県を一例にするー
18	がんの標準化死亡比に関連する要因分析手法の検討と医療特性の類型化の可能性

2010～15年のシンポジウムのあゆみ



■H-PAC 第5期 参加者

「患者支援者」「政策立案者」「医療提供者」「メディア」の4つの立場から募集しました。本年度は、H-PAC最終年度であるため、例年通りの新規参加枠に加え、経験者からも参加を募り、合計75人が参加いたしました。

内訳と参加者の主な属性等は次のとおりです。なお、参加者の居住地は首都圏にとどまらず、遠隔地からの参加も複数みられました。

- 患者支援者 21人(患者団体主宰者、医療ソーシャルワーカーほか)
- 政策立案者 22人(厚生労働省職員、県・市議会議員、自治体職員、職能団体政策担当者、経営コンサルタントほか)
- 医療提供者 22人(病院勤務医師、診療所医師、看護師、医薬品/医療機器メーカー社員、医療機関企画管理担当者ほか)
- メディア 7人(全国紙記者、テレビ局記者、専門誌編集者、フリーランスライターほか)
- 東京大学公共政策大学院生 3人

参加者の声

※所属・肩書は当時のものです

【患者支援者】

篠原 正泰

富士フィルムグループ健康保険組合

H-PACの一年の活動は、まさに玉手箱のようなもの。バラエティ溢れる講義や深い研究活動からくる新鮮な発見と驚き、そして何よりH-PACならではの素晴らしいメンバーとの出会い。唯一の健保出身者として当初アウェー感もありましたが皆様の助け舟で終了できました。感謝の言葉しかありません。



服部 満生子

NPO 法人医療の質に関する研究会

草加にみんなの保健室をつくる会主宰

政策誘導の医療の在り方に疑問を抱きながらH-PACに参加させていただいた。戦略プラン策定シートを活用しながら論理的に考えることを学んだ。終了までに行政や地域の医師と議論しながら、地域に住民主体の「みんなの保健室」を立ち上げることができたことは、私にとって大きな成果となった。



【政策立案者】

出原 光暉

医療コンサルタント

私は、H-PACでの活動を通じ、医療を受ける患者の意見の大切さと、そのような意見が政策策定時に十分に反映されないという現実を痛感させられました。そして何より大きな収穫は、医療に携わるステークホルダー間の協働作業を通じて、より良い医療を実現できるのだという希望を与えてくれたことでした。



宮本 亮平

武蔵野市

普通の職務とは違ったフラットな関係のグループ活動の中でリーダー役をさせてもらい、グループ運営の良い経験になりました。グループメンバーはとても熱心で、前向きな活動を行うことができました。今後の発展を期待できる活動が継続しており、「医療を動かす」一つの役割を担えればなと思っています。



【医療提供者】

森島 肇

下総精神医療センター

病院外でも地域活動をしている中、医療政策やまちづくりに作業療法士の専門性を生かして地域住民の健康な暮らしを支援できないかと考え参加しました。多種多様の方々と議論を交わし、視野の広い考え方をする機会となりました。参加した研究プロジェクトが「医療を動かす」よう、引き続き頑張ります。



東京大学公共政策大学院医療政策・教育研究ユニットは、2016年3月をもって終了いたしました。
これまで資金提供いただきました各企業・団体様に御礼申し上げます。
本プログラムにご協力いただきました、講師、アドバイザー、メンター等の方々に感謝いたします。
5年間の参加者のみなさま、ありがとうございました。
みなさまの社会でのさらなるご活動・ご活躍を期待しております。

東京大学 公共政策大学院 医療政策教育・
研究ユニット(HPU)
医療政策実践コミュニティー(H-PAC)事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
E-mail hputokyo@gmail.com
URL <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/HPU/>
(「東大 HPU」で検索)